

5・6 歳齡保育園児の隠された感情及び誤信念の理解と仲間関係

森田 朋佳

【背景】人のコミュニケーションの基盤となる様々な社会的能力は幼児期に現れ始め、仲間との相互作用によって発達していく。そして社会的能力の発達は、幼児期の仲間関係に影響を与え、より複雑な仲間関係の構築を可能にする。このように社会的能力が幼児期の仲間関係や仲間との相互作用に対して影響を与える事について、これまで多くの研究がなされてきた。しかしながら、それらの多くは仲間関係の測定において他者からの主観的な評価に依存しており、幼児の日常場面の観察によるネットワーク分析を用いて測定したものは無い。そこで本研究では、人のコミュニケーションの基盤として重要だと考えられる能力(語い能力、心の理論、隠された感情の理解)を測定すると共に、日常場面の行動を観察し、実際に幼児が形成する仲間関係の指標(ネットワークにおける中心性、社会交渉の相手人数、親友の人数)を算出した。中心性とは、当該の社会交渉のネットワークの形成・維持に、その児がどの程度中心的な役割を果たしているかの指標である。そして、3つの社会的能力が幼児の仲間関係に与える影響について検討した。

【方法】本研究は、大阪市内の保育園における5・6歳齡児クラスの2クラスに所属する73名(男児34名、女児39名)を対象に行った。語い検査、誤信念課題、隠された感情課題を個別に実施し、各課題における理解得点を得た。また保育園での自由遊び場面において、走査サンプリングを用いて研究協力者全員について近接している児と一緒に遊んでいる児を記録し、児の近接および遊びのデータから、児の近接ネットワークと遊びネットワークにおける中心性、相手人数、親友の人数を算出した。日齡、性別、語い得点、誤信念理解得点、隠された感情理解得点を説明変数とし、それらが児の近接ネットワーク、遊びネットワークにおける、中心性、相手人数、親友の人数という目的変数に対して与える影響を検討した。その際、児の中心性に関しては、重みありと重みなしの2種類の中心性を算出し分析を行った。

【結果と考察】語い能力は、中心性、遊び相手人数には影響を与えなかったが、語い能力が高い児は近接ネットワークにおいてより多くの親友を持つことが示された。心の理論は、児の重みなしの中心性を低め、遊びの相手人数を減らすような影響を及ぼしていたため、高度な心の理論を獲得している児は他児と広く関係を持たないことが明らかになった。先行研究から心の理論が発達している児ほど人気があることが示唆されているため、この遊ぶ相手の範囲の狭さは児が敬遠されているのではなく、児自身が遊び相手を選んでいるために起こっていると考えられた。また心の理論は、児の重みなしの中心性には影響を与えたが重みありの中心性には影響を与えなかったため、高度な心の理論を持つ児は自身で関わる他児を選ぶ一方で、選んだ他児とは頻繁に関わっていると考えられた。また心の理論は児の相手人数には影響を与えたが親友の人数には影響を与えなかった。つまり高度な心の理論をもつ児は選んだ遊び相手とは均等に遊んでいる可能性が示唆された。隠された感情の理解は児の重みなしの中心性を高め、近接や遊びの相手人数を増やすような影響を及ぼした。同様に他者の心的状態の理解である心の理論にはこのような影響が無かったことから、児がより広く他児と関わり合う要因として、相手の内的な信念の中でも「感情」を理解することが重要であると考えられる。隠された感情の理解は児の親友の人数を減らすような働きも見せたため、隠された感情の理解が発達することにより、児はより多くの他児との関わりを持てる一方で、親密な仲間関係を築く機会は少なくなる可能性が示唆された。(比較発達心理学)